片　山　の　今　昔

熊　沢　宗　一

太古の東京は海であって土砂の堆積と、土地の隆起とによって陸地になったと云うことであるが、妙正寺川を廻る片山の丘陵地帯からは、沢山の古代の遺物や遺跡が発見せられたので、原始時代の民族が居住して居たことを確認することが出来る。

私の子供時代に江古田１丁目２１２３番地先の路傍に行人塚とて小高い塚があったが、それが高塚式の古墳であったかとも思われる。

長禄元年太田道灌が江戸城を築いて、この地方を江戸荘と名付け江戸廻所となすとあり、片山村は江戸日本橋より行程３里余、村の広さ東西４丁、南北４丁、民家僅かに１６戸であった。

正保４年８月関東郡代伊奈半十郎忠治が検地した時に、田１９石、畑１８石５合の査定であった。

我が片山村は野方領に属し、細田嘉右衛門知行を踏襲し、岩崎善左衛門が代々名主役を務め、原組、下組、北原組、の５人組制度があって、明治元年江戸は東京と改め、小菅、大宮、品川、の３県に分かれ、片山村は品川県の所属であった。

明治４年東京が朱印改正の際、朱印外を６大区に区画したが、同６年区制改定の時、片山、江古田、上鷺宮、下鷺宮、の４か村は第８大区７小区となった。

明治１１年１１月大小区制は廃止せられて、東多摩郡となり、前記４か村連合して戸帳役場を設け、明治１７年片山村は江古田村に合併し、明治２２年、新井、上高田、上沼袋、下沼袋、江古田、上鷺宮、下鷺宮、を合わせて野方村となった。

明治２９年４月１日、東多摩郡と南豊島郡とを合わせて、豊多摩郡と改め、大正１３年４月１日町制を施行して、野方町と称し、昭和７年１０月１日市郡合併によって、野方町と中野町とを合わせて中野区となって現在に至ったのである。

むかしから大正の始め頃迄の片山は純情なる農村で２０数戸に過ぎなかった。夏の野菜作り秋の収穫と干大根が片付くと、割合に農閑期が長かったのであまり好ましからぬ遊び事が、大人から子供までに及ぼした。

日露戦役後国運の進展に従い、尚一層国民の奮起を必要とするのときを痛感したので、片山部落の青少年諸氏と語らい、相互の親睦を図り、風俗を善良ならしめ、学術を研き、産業の改良進歩を図り、且つ愛国の思想を涵養する目的を以て、明治４０年１０月片山青年団を組織した。その時の団員２７名、１か月の会費は金参銭であった。

その事業としては、２反歩余の畑を借入れ３０坪宛に区画して、団員各自に、その１つを割り当て、競作をして農作物の改良進歩を励行し、農閑期の休日には、撃剣の技を錬磨して心身の鍛錬に努め、且つまた母校であった江古田の遷喬小学校の、山崎苗清先生に懇願して、特に夜学を許され、専心学業を研修した。

当所の古老は静連として俳句の会を度々催したので、団員の希望もあり俳句も少しく習った。

たまたま明治４３年の９月、東京地方の大水害に際しては、東京市からの要請があったので、団員１５名深川に行って、水浸しになった便所のくみとり作業に数日間無料奉仕したことがある。

その当時農村の道路は独り片山ばかりではなく、主要道路を除けば、砂利を敷いた道路は１本もなく、雨降る日や冬の霜、雪融の時には泥濘殊に甚だしく、殊に当地は片山と云う如く、坂道が多く通行の出来ぬ個所もあり、少なからぬ困難をしていたのである。

その当時片山の北方を流れる妙正寺川には、砂利の堆積しているのが目に付いたので、管理をしている淀橋浄水所長に、妙正寺川の浚渫を出願して許可を得たので、農閑の期に団員を総動員して、その砂利を引揚げ片山の村道に敷いて、村内の人は勿論他の人々にも便宜を与えて、大いに喜ばれたのである。

以上の如く全団員一致協力自己を捨て、ひたすら修業を積みつつ、その傍ら郵便貯金を実行したのである。

大正５年野方村青年団創立に当り、これに合併して野方村青年団第３分団となった。

明治４０年に早くも青少年補導育成、また自己の修養のために、青年団を組織して、幾分でもその効果を発揮したのは、東京府下に於ける我が片山青年団が最初ではないかと思われるのである。

江古田村の自治機関は、むかしから、片山、東、原、丸山、籠原、の５組に分かれて、各組に組総代を選任し、１か月交代の月番２人宛で、村内全般のことを処理したが、この制度は、大正１３年頃まで存続した。

片山では大正１４年私が組総代を引き継ぐと同時に、組総代制を行司会に改めたが、昭和２年片山会に改編し、防犯、防火、衛生、また道路の補修、下水の清掃等に奉仕し、支那事変より大東亜戦争に突入するや、区の補助機関として、隣組を編成し、片山町会内を、５部４８隣組となし、物資の配給に、国債の消化に、出征軍人の歓送に、英霊の出迎えに、町会全般に亘って最善を尽し、昭和２０年５月２５日夜半の戦災には、町会区域の過半を焼失し、町会員の３分の２即ち４００余世帯の罹災者を出したのである。大東亜戦争の終了後、進駐軍の命に依りて、町会長は追放となり、町会は解散した。

昭和２２年１１月中野防火協会片山支部を結成して、解散後の町会事務を整理し、同２６年３月野方防犯協会片山支部の結成にて、防火防犯を強化し、且つ街路灯の設置をなして、町会内の治安に万全を期した。

昭和２８年５月３日片山会が設立して、防火防犯の両支部を包含し、総務、保健、警防、青少年、婦人、の５部を設け、青少年の補導育成に、生活の改善防犯防火衛生に、且つまた社会事業に協力し、尚会員相互の親睦、福祉の増進を図り、町内の向上発展に、力を竭しつつある。

＊

片山鎮守北野神社は、往古には天神社と云ったが、明治５年北野神社と改めた。

祭神は菅原道真公で祭祀の起源は判然としないが、慶長１２年京都の北野神社が御造営の際、当村片山の人達が、菅公を崇拝するの余り、ここに奉祀したのだと伝えられている。

菅公の御遺蹟を尋ねるに、菅家は野見宿弥の後裔で、光仁帝の御代に菅原の姓を許され、父を是善公と云い、母は大伴氏、承和２年６月２５日京都の菅原院に誕生、幼名を阿呼と呼び、のち吉祥丸と称せられた。その高徳を仰ぎ、菅公または菅丞相と称え奉った。

御齢５歳の時、庭前に咲ける梅の花を見て、

うつくしや紅の色なる梅の花
　　阿呼の顔にもつけたくぞある

と口ずさみたるを、帝の御耳に入り、参内するよう御内詔があったのが、竜顔に接し、君側に近侍し給うた始めである。

それより帝の御覚えめでたく、御齢５５歳の時、正三位右大臣近衛

大将に進み、５７歳延喜元年正月７日従二位に昇叙せられたが、左大臣藤原氏の讒言によりて、４月２５日突如として、筑紫大宰権帥に貶せられ、九州の辺地に下向したが、府中に入らずして、榎木寺に住い一歩も外に出ず、ひたすら謹慎せられたのである。

榎木寺の家は破損して雨漏り、炊煙絶える事しばしばあり、灯油尽きて明りを採ることが出来ず、窮乏の極に達したが、君恩の篤きに感じ、天を怨まず人をとがめず、遥かに京師を望み、御賜の衣を捧げ、天拝山に玉体の御安泰を祈らせられた。かくて２年ののち、御齢５９歳身体衰え脚気と疱疽とを患い、延喜３年２月２５日遂に薨去された。御遺骸を安楽寺に葬り、聖廟と称え、南無天満大自在天神と崇め奉り、延喜５年随臣味酒安行が、神殿を造営し続いて左大臣藤原仲平が、勅を奉じて奉行し同１９年に至り、御造営が竣工したのである。

帝は公の誠忠を追懐し給いて、その本官を復され、のち、一条天皇の正暦４年、正一位太政大臣を贈り、文教の神として、古今に渉り、世人の崇敬篤いのである。

私は昭和１５年５月西国地方巡遊の砌り、太宰府天満宮に奉拝して、親しく御神徳を仰ぎて、

東風吹くや西の都の太宰府に
　　文の神とてあがめられけり　　一空
西の里永久にかほるや梅の花　　一空

文明９年４月１４日太田道灌が豊島勢と、この地付近で戦った、江古田が原沼袋合戦の時に、当所の北野神社に戦勢を祈願したと、云い伝えている。

当社は昭和３年から５か年間の継続事業として、氏子各位の浄財によって、社殿の改築を計画して、同８年現在の社殿が竣工した。

境内は江古田公園に続き、樹木茂り風致また掬すべく、春夏秋冬、来遊者の跡を絶たぬ程である。

（筆者は初代町会長・故人）